



TITLE:

<批評・紹介>昭和十三年度朝鮮古蹟調査報告

AUTHOR(S):

藤岡, 謙二郎

CITATION:

藤岡, 謙二郎. <批評・紹介>昭和十三年度朝鮮古蹟調査報告. 東洋史研究 1940, 6(1): 62-65

ISSUE DATE:

1940-12-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/145721>

RIGHT:

製品及玉器・雕牙骨器類と項を分つて、或ひはそれ自體に即し或ひは他との關係に於いて著者獨特の綿密な考察がなされて所謂安陽物の性格を描出されてゐる。

その性格として著しきは容器に於ける形の類似せることであり裝飾文の同式なることである。即ち前者については骨角・玉石等の容器の形が材料による制限の許す限りに於て銅製尊彝の形に緊密な關係を保つことによつて知られる。後者に就いては各々の遺物に示される如く繁雜な動物文が一貫した主流をなすのみでなく、更に細部に於ける特殊な所謂クセにまで相似たものが見出される如きである。

この二つの著しい性格が本書に於いて取扱はれた所傳殷代の安陽出土品の性格であるが著者はその性格觀に條件を附される。即ち取上げられた遺物が何れも美術品乃至商品化した貴重品に偏してゐることはこれらの遺物が主として當時の支配階級のものであり、従つて當時の一般民衆の日常用器を缺いてゐることを示してゐる。さればその性格觀は當代文化全體の上からではなくまでも一面的であることである。

かくて著者は所傳安陽出土品の性格觀を立てられてゐる。更にその考古學的立場からとかく看却されがちな當時の普遍的遺物たる土器等に對する將來の研究を促されてゐるが、かくしてはじめて當代文化の全體的な把握が可能なることはまことに著者

の言の如くである。

〔澄田 正一〕

昭和十三年度朝鮮古蹟調査報告

四六倍版、九一頁、圖版八八葉、
昭和十五年九月發行 非賣品

朝鮮古蹟研究會の半島遺跡遺物に關する諸調査は、今やより科學的にして、より着實なる方法を以て行はれ、吾人の朝鮮古代文化に對する知見を深めるに緊要なる基礎的諸事實を提出してゐるのはよろこばしい事實である。本書はその昭和十三年度に於いてなされた調査の報告であつて、前年度にも増して新しい種々の事實に關する簡潔にして、而かも要領を得た記述から成つてゐる。即ち卷頭の梅原末治研究員の同年度古蹟調査概要に見らるゝが如く、調査の主對象となつたものは、三國鼎立時代に於ける高句麗、百濟、新羅の三國の古代遺跡であるが、一部分それ以前の史前のものにも及び、其の範圍は全鮮に亘り、且つ古代寺址に於いて著しいものがある。

さて先づ高句麗の遺跡としては、小泉顯夫・米田美代治兩氏の調査に係る平壤府外清岩里廢寺址が擧げられる。この廢寺は後、高麗時代に重創を見た如くであるが、其の間に高句麗時代の遺構と遺物とを出して、同代寺址の研究に劃期的な事實を提示した。即ちその伽藍は中門（門址）、塔（八角殿址）、金堂（中央大殿址）、講堂（數碑殿址）等と思はれる主要建築物が南

北に一列にならんだもので、更に塔の左右には東西兩殿を配し、之を一郭として、周圍に廻廊を繞らしたものなる事が推測復原されたのである。これは我が四天王寺式伽藍配置に彷彿たるものとして、先年調査された百濟の扶餘軍守里廢寺址と共に我が古代寺院史研究の上にも興味ある事實である。本伽藍の中、右の主要な塔と思はれる八角殿は破壊の程度やゝ著しいものであつたが、その様態は先づ岩盤を八角形に削つて臺狀となし、その周圍に石材を並置して基壇となせし如くであり、之が外周には雨滴れ受けと思はれる玉石敷を繞らし、之が一部は少くも更に中門並びに西殿址には連絡されてゐる狀態が推された。かかる塔址は從來見ざりし形態に屬する。

次に同じく寺院址として石田茂作氏・齊藤忠氏等に依つて行はれた扶餘に於ける百濟時代の調査が報告されてゐる。一は扶餘東南里の廢寺址であり、他は佳塔里のそれである。このうち後者は試掘の程度にすぎず、僅かに其の百濟時代の營造にかゝる事を推し得るにとどまつたが、前者は前年調査して四天王寺式配置の伽藍であることの確められた軍守里廢寺址に近かく位置して、有名な平濟塔を含む寺址と共に、扶餘山を北方に控えた都京址の中心地帯に造営された寺址の全貌を明にした。遺址は講堂と推すべき北方基壇、これと七十尺の間隔を置いて發見された金堂址に當つべき中央基壇、これを圍んで南方に中門

址を存する廻廊址等から成り、而して中央基壇の前方に水槽址のあることも分り、亦北方基壇の東西に夫々基壇が存して、之は鐘樓址、經藏址等にあたるものと想定される。但し塔婆を缺くのは軍守里廢寺と趣を異にするが、著者は金堂址から中門に到る間や、又その東西兩側より廻廊址までの間隔等が夫々七十尺を單位とせる事實、即ち夫々割合の一定なる間隔を持つてゐる事實を指摘して、兩者の基礎計畫の一致を強調してゐる。なほ遺物としては瓦の他に、我が法隆寺夢殿救世觀音を彷彿せしむる蠟石製佛像片の發見が注意される。次に慶州にては新羅一統時代に屬する千軍里寺址が、東西の三層石塔の復建を機會に米田美代治氏の手で行はれた調査報告がある。氏はその精密な調査に基いて本寺址石塔の造成と伽藍配置との上に、佛國寺のそれと極めて類似せる所あるを述べ、其の使用尺度が標準唐尺に依ると何れも完尺を得ることから進んで造寺計畫に説き及んでゐるのが注目される。

以上は本書を特色づけてゐる夫々の興味ある寺院址の發掘調査に關するものであるが、次に古墳墓の調査としては、先づ澤俊一、有光教一兩氏の行つた全羅南道羅州郡潘南面の古墳の報文が挙げられる。これは甕棺を主體とした古墳であつて、既に早く谷井濟一氏に依つて調査され、重要な事項が知られたのであるが、而も不幸にして其の詳細の學界に知られてゐないも

のである。古墳は何れも紫微山を取圍む丘陵に存在するもので、中で新村里並びに徳山里にある若干が調査せられた。是等甕棺の存する墳形は、有光氏に依ると、例へば新村里第六號墳の如く、内地の前方後圓墳の外貌に髣髴たるものをも含んで居り、亦甕を葬つた位置の如きも、墳の頂に近き所にあつて、我が古式墳に趣きを同じくする様である。掘て檢出された甕棺は大半盜掘されてゐたが完存せる甕は身・蓋共に黒灰色を呈し、厚手にして表面に席目文を打出した焼成堅牢なるもので、北九州に見る彌生式の甕棺とは自ら趣きを異にしたものであつて、副葬品中には、勾玉、璆頭柄頭大刀、及び多數の祝部風の土器があつて全鮮を通じて最も日本的な色調を帯びて居り、その點で外形に相應するものがある。著者は更に之に對し、三國時代の所謂倭人の墓と言つてゐるのを聽くべきであらう。なほこの報告には同時に調査した興德里にある一石室墳を併せ録してゐる。これは規模の小さい排水溝の存する横穴式に屬するが、中に百濟式の壺、同座金具等を出土し、公州宋山里古墳發見遺物に相似たものゝあることが擧げられてゐる。古墳調査の第二は大邱府附近に於ける竪穴式と横穴式との中間型とも見る可き石室墳に關する齋藤忠氏の調査報告である。其の一つは大邱府郊外の新池洞丘陵一帯に存するものであり、他は達城郡解顔面のものである。中で後者はその石室を二室に分ち、前室に遺骸を置き

後室には副葬品のみを容れた所謂土器室をなしてゐる點に興味ある事實を示してゐる。加へるに其の解顔面第二號墳は封土の具合が、あたかも積石塚の趣きを呈してゐるのは、慶州附近の積石木槲墳との聯關を考へしめること筆者の指摘する如くである。最後に本書には、同じ大邱府の大鳳町に存する支石墓に對する藤田亮策研究員の調査報告が收録されてゐる。報告に依ると大邱附近の支石墓群は師範學校内のものを基點として調査されたその第一區より第五區に到る迄、すべて南北の磁針を僅かに西に傾き乍ら、ほぼ一直線上に並列してゐる。二基乃至三基が一群をなし、而も一群と一群との間、若干の間隔を保持して列んでゐる。今回調査のものは右の中第一區と第五區に相當する。何れも支石墓とは言ふも、北鮮に見るが如き丈の高きものでなく、石室は地下に存し、天井石は、ほぼ塊岩より成り地上に直ちに接した類である。うち第一區の第二支石墓、第三區の第三支石墓は扁平なる撐石で覆はれてゐたが、その直下の石室に達する周圍には河原石を積み敷き、あたかも積石塚の中央に撐石を安置した形態を存した。而して發見の遺物は磨製石劍の他に、第一區第二支石墓中からは、かの咸北の石器時代遺跡に見る丹塗磨研土器があつた點が特筆せらるべきである。藤田氏は其の報告の終りに、從來の調査から大邱支石墓の性質を綜括して、この種遺跡の性質觀の上に一の重要な事實を示してゐる。

る。

以上本書の内容の概要であるが、これからすると本書は昭和十三年度に於ける半島の考古學的調査の縮圖と言ひ得る。多方面の科學的調査を載せた此の報告書は外觀上では本文僅かに百頁、圖版また之に充たざるものではあるが、質に於いては内地の調査報告書類は勿論、美文にてつくるへる多くの古代文化史書を遙かに凌駕するものとして、永く光彩を放つであらう。評者は將來更に半島に於ける此の種考古學的調査報告書の續出を祈つて止まないものである。

〔藤岡謙二郎〕

通溝 卷下 滿洲國通化省輯安縣

高句麗壁畫墳

池内 宏・梅原末治共著

昭和十五年七月 日滿文化協會刊

昭和十年秋及び十一年秋の二回通溝地方の高句麗遺蹟に對してなされた調査の結果は既に池内博士により『通溝』上巻として昭和十三年十月その一半が出版されてゐた。上巻に於いて通溝遺蹟に對する全般的な考察がなされたが古墳としては石塚に重點が置かれた。壁畫古墳は殆んど土塚であるが上巻に於いては五塊墳・牟頭塚が石塚と併せ述べられて石塚・土塚の年代に關する意見を見たのである。即ち丸都國都時代（紀元二〇〇年頃―）は石塚が通じて行はれ土塚の多くはそれに對して長壽

王の平壤遷都（紀元四二七年）以後の丸都舊都時代のもので從つて平壤遷都を大體の境として石塚から土塚へと移變したものであらうと述べられてゐた。

その土塚の中壁畫裝飾を有する舞踊塚・角抵塚・三室塚・四神塚・牟頭塚及び環文塚が本下巻に於いて述べられてゐる。先づ相並んだ舞踊塚・角抵塚は何れも石室内が一字の居室と見たてられて斗拱を備へた柱及び梁が描かれ被葬者を中心とした物語的な壁畫が高句麗人の風俗を具體的に示して比較的よく残つてゐる。三室塚の壁畫として先づ注意すべきは梁狀の持送りを支へる怪異なる力士像であつてこれは多くの壁畫墳に見られる柱狀裝飾から四神塚に於けるやうな特殊な擬柱神人裝飾に移行する過渡的意匠であるとされてゐる。四神塚に於いて興味あることは持送り天井部に見られる怪異なる獸面でそれは避邪を象徴すると同時に四肢の示す所擬設の束の用をなしてゐることである。

更に牟頭塚・環文塚が述べられ終つて結語として通溝平壤兩地方の壁畫古墳の年代觀に及んでゐる。即ち内部構造・壁畫の手法に本づいて先づ梅山里四神塚を最も古く西暦五世紀前半に置き三室塚を五世紀後半とし牟頭塚は墓誌から六世紀初と推されてゐる。角抵塚・舞踊塚は安城洞大塚と相通するものがあり通溝四神塚・湖南里四神塚と共に大體高句麗下代の中その